

## E. M. シオランについて

山中 哲夫

Tetsuo YAMANAKA

(ヨーロッパ文化選修)

1995年6月22日、私はパリにいた。午後、メトロ入口近くの新聞スタンドで到着したばかりのその日のル・モンド紙を買い、サン=ジェルマン大通りに面した角のカフェ“Boul' Mich”で開いて読んだ。文化欄に、E. M. シオランの死が報じられていた。前々日の火曜日の朝、オデオン通りにある自宅のアパルトマンで死去したという。享年84歳。《破壊の貴族、シオランの死》と書かれた見出し、最晩年の彼の写真をながめながら、しばらくカフェを飲むのも忘れていた。「ついに死んだか」というのが私の最初の感慨だった。

オデオン通りといえば、このカフェから歩いて12、3分くらいしか離れていない。オデオン座に突き当る道で、その裏手はすぐリュクサンブール公園になっている。この通りは何度か歩いたことがある。彼がそこに住んでいたとは想像だにできなかった。リュクサンブール公園やオデオン界隈ですれ違ったかもしれない。改めて彼の写真をながめる。これほど深い寂寥感を湛えた目はそうあるものではない。こんな眼差しの白髪の老人に私は出会ったことがあっただろうか。

《ルーマニア出身のこの作家は、1937年以来パリに定住し、「存在の誘惑」を執拗に拒みつづけたが、6月20日火曜、84歳で亡くなった。青年期の反ユダヤ主義と外国人排斥を脱して、懐疑のアポロジに身を捧げた》新聞の見出しはそんなふう書かれてあった。しかし彼の懐疑はデカルト的な方法論としての懐疑では元よりない。いっさいのドグマを排し、あらゆる哲学体系を否定することは、えてしてそのこと自体が一種のドグマとなり、新たな体系を作り出すことになりかねないが、彼はその畏に陥らなかった稀有の人である。無防備で、裸形で生きた彼の思想は、あらゆる主義を拒絶する。あまたある「懐疑哲学」との相違がここにある。アカデミックな哲学は、堅牢な知のシステムを構築し、これを牙城として理論の擁護に努める。シオランというこのモラリストは、理論に安住した講壇哲学者たちの欺瞞を暴き、これに呪詛の言葉を投げつける。彼を異端の哲学者と呼ぶのも由なしとししない。しかし、この呪詛には、自己自身の存在に対する呪詛も含まれている。すなわち、生まれてきたことへの憎悪

である。彼にとって最大の「災厄」は自分自身の「誕生」であった。モンテスキューの言葉に彼が抱いた共感によく理解できる——「葬式などやめてもらいたい。人はその死を嘆くべきではなく、その誕生を嘆くべきだ」

1933年、ベルリンに赴いたさい、彼はドイツ表現派とりわけココシュカに接近した。それはココシュカの“形而上学的マゾヒズム”に惹かれたためだが、むしろ私は、ココシュカよりも、タピエスにシオランは似ていると思う。パリ滞在中にタピエス展を見る機会に恵まれたが、タピエスのキャンバスは傷そのものである。悲痛この上ない絵画——ボードレール風言えば、この絵は切り裂くナイフにして切り裂かれた傷口であり、シオランの思想もまた、その存在もまた、このナイフでありこの傷口である。再び彼の写真に目をやる。自殺を逃れつづけ、ついに84歳で天寿(?)を全うした老人の顔がそこにあった。E. M. シオランとは大いなる矛盾の存在であった。

\*

彼はルーマニアに生まれ、パリで生き、パリで死んだ。これは何を意味するのか。異邦人として生き、異邦人として死んだということである。パリの残酷さ、とりわけ異邦人に対する酷薄さを思い知らされ、辛酸を舐めつくした果てに死んだということである。パリは猥雑極まりない都市である。あらゆる汚物を嘔み込む下水処理場である。並外れた許容度と残酷この上ない冷淡さとを合わせ持った、魔物のような都市である。パリを訪れると、この町に住みたくなる。このような都市は世界のどこにもない。魔物の魔物たる所以である。異邦人として住むということは、畢竟アルコール中毒者か精神病者になるということである。これは宿命的な成り行きである。パリにいかにか精神病院が多いことか。リルケのマルテも小説の冒頭でサン=タンヌ病院を訪れたではなかったか。最近、14区の病院に日本人医師による日本人向けの診察室が開設されたという。私の知人にも長いパリ生活の果てに分裂病になってしまった者がいる。パリの都市風景は美しい。この

美しさは稀有なものだ。しかしこの美しい風景に溶け込んだパリの人々をよく見ると、そこには貧困、悲惨、テロ、死が潜んでいる。メトロの乗客の眼差しは一樣に暗く、その顔は、無表情である。失業とアルコールと麻薬と絶望。

パリ。天国からもっとも遠く離れた一点。それでもなお心おきなく絶望できる唯一の場所。<sup>(1)</sup>

(「空虚の源にて」)

シオランの目にはこのパリの「災厄」が映っている。1947年の夏、彼はディエップに近い片田舎でマラルメをルーマニア語に翻訳する仕事に従事した。彼が以後フランス語で執筆する契機となったのはこのマラルメ翻訳である。必ずしも読み易いとは言えない彼の癖のある文体は、生涯抜けなかったワラキア地方訛りとともに<sup>(2)</sup>、マラルメ翻訳からの影響を受けているのは明らかだろう。フランス語は自分の体質に合っていないと彼は告白している。明析にならざるを得ないフランス語は、溢出し、爆発する自分の真の自我、悲惨な自我とは対極にある言語だという<sup>(3)</sup>。フランス語の明析さと格闘し、フランス語を解体するのに悪戦苦闘したマラルメの努力が、形を変えてシオランに引き継がれていると言ってもよいかもしれない。ともかく、不眠と死の観念に取り憑かれたこの破壊の哲学者には、やはり同じ観念に取り憑かれた石胎の詩人こそがふさわしかろう。シラオンの翻訳より約80年前に、若き象徴派詩人は絶望的に叫んだではなかったか——「破壊こそ、わがベアトリーチェであった」と。

失敗、挫折、貧血、無為、虚無、欠落、喪失といったネガティブな用語にシオランの文章は満ち満ちているが、これらの言葉はすでにマラルメの詩篇に撒き散らされている。マラルメは西洋的虚無を東洋的「無」に変えようとした。シオラン然り。シオランが目ざしたのは、ただ一点、自己破壊の果ての、なにもも存在しなくなった世界の空無の平安、これである。これが彼の救済であった。

彼の死のちょうど一ヶ月前、ガリマール社のQuartoシリーズで彼の全著作集が一巻本で刊行されたばかりだった。私はイタリアン大通りのFNACで偶然手に入れていたので、ル・モンド紙を読んだその日の夜、自分の部屋でこの書物を開いてみた。巻頭を一枚の写真が飾っていた。それは、彼が青春期を過ごした Sibiu の家の窓の写真であった。古ぼけた木枠の窓ガラスが開け放たれていて、室内は真っ暗である。布製のブラインドがやや斜めに傾き加減に半分ほど下ろされている。この何もない窓の写真をながめて、ふと“vacant” (空っぽの、空席の、空位の) という言葉が思い浮んだ。マラルメが好んで使った用語だが、シオランの存在様式をこれほどの確に表わした言葉も

ないだろう。この窓の写真に、さきほどのカフェでながめたル・モンド紙の顔写真が重なって、当然の如く私はマラルメの例の有名な『窓』の最後の一節を思い返した。

——たとえ永遠に落下しつづける危険を冒すとしても。

“vacant” という語はこの無限落下を定義づける語に他ならない。宙吊り状態は死よりも恐しい。六十年以上も世界と自己を否定しつづけ、なおも生きながらえていたということは、想像を絶することだ。絶望は誰にでもあることだが、絶望しつづけることは並大抵のことではない。真に絶望するためには、それなりに才能が必要である。シオランはこの絶望の天才であった。彼にはすべてが失われている。国籍も、言語も、理想も、救済も、そしてむろん神も。

シオランを読む前日まで、私はル・クレジオの『物質的恍惚』を読んでいて。物質の手触りが伝わってくるような、原初の海を思わせるような、不思議なりアリティを持った内容の文章だったが、シオランを読みはじめた途端、それまでの無機質なル・クレジオの文章ですら、何かロマンティックな、どこかがゆるんだ、生ぬるい文章に思えてきた。ル・クレジオの文章が一挙に生彩を失ってしまったのだ。シオランの抒情性を排除する力には、異常なものがある。ところが、Quarto版の例の窓の写真の次頁に掲載された風景写真を見て、私は別なことを考えた。それは彼の生まれ故郷 Rășinari の写真だった。南ドイツによく見られる三角の塔をもつ小さな教会が立つ、緑豊かな牧歌的雰囲気、を湛えた静かな村の風景だった。このような美しい村に生れ育った人の感性を思うと、彼の本質のある部分には、きわめて抒情的なものが隠されていたのではなかったかと考えた。いやむしろ、溢れるほどの抒情性があり、いくらでもその抒情の調べに乗せて、感性豊かな歌が歌えた人ではなかったろうか、と想像したのである。彼は自分の中にある本来のこの抒情性を抹殺したのではあるまいか。もしそうだとすれば、これはまたマラルメの事情と大変よく似ていると言わなければならないだろう。マラルメも本来的には抒情性の強い詩人であった。彼は意識的に自分の抒情的な竖琴の糸を切ったのである。乾いて、不毛の、難解きわまる彼の詩句の奥底には、この抒情の残滓が沈んでいる。シオランの絶望的な調子を帯びたアフォリズムの激越な言葉の背後にも、牧歌的なハーマニアの片田舎の自然が、一種のネガフィルムのように映っているのではないだろうか<sup>(4)</sup>。

\*

シオランはアフォリズムという形で、もっとも強烈

にその否定・破壊の哲学の威力を発揮する。小さな器に閉じこめられるほど爆発力を発揮する時限爆弾さながらである。そういったアフォリズムの一つに次のようなものがある。

いかなる領域であれ、自己表明したり活動したりすることは、多少ともカムフラージュされているが、それは狂信者の行為である。自分が使命を帯びていると思えなくなったとき、存在することは難しいことだ。行動することは不可能だ<sup>(5)</sup>。

(「生誕の災厄」XI)

人は自己に対して狂信的にならなければ生きてゆくことはできない。この世に生まれ出たのは、ある使命を遂行するためで、そのためにいまここにこうして生きているのだ、と自らに信じ込ませなければ、人は瞬時も真に生きていることはできない。この「使命を帯びている」という信仰を抱けないとき、あるいはこの使命を失ったと感じたとき、もはや人は生きてゆくのが困難となる。あらゆる行動が停止してしまう。作家も、画家も、宗教家も。ただ一つ残された行動は、自殺である。シオランにとって、自殺こそがもっとも崇高な失地回復の方法であった。神に対して優位に立ち得る唯一の手段であった。

一種の牢獄の中で生まれ、肩に重い荷と思想を背負って歩いてゆくわれわれは、これはいつかは終るのだという可能性がなければ、一日ですら生き延びてゆくことはできない。この世界の呼吸し難い鉄と空気は、われわれからすべてのものを奪い去ってゆく。ただ一つ、自殺する自由を除いて。この自由こそが、われわれを押し潰している重荷に打ち勝つ力と誇りとを、われわれに吹き込んでくれるものなのである<sup>(6)</sup>。

(「自己破壊の方策」)

自殺せずに死ぬことは、その死期を神に委ねることである。したがって崇高なる瞬間は神に属している。自殺はこの神に背負い投げを食らわせることに他ならない。キリスト教はなぜ自殺を最大の罪と見做したか。いやキリスト教に限らず、多くの宗教が自殺を禁じたのはなぜなのか。その理由は神殿と神々を貶める不服従をそこに看取ったからである。オルレアンの宗教会議では自殺を殺人よりも重大な罪として断罪した。なぜなら、《殺人者には常に悔い改める機会があり、自らを救う可能性が残されているが、これに対して、自らの命を奪った者は、この救済の閾を越えてしまったからである。》<sup>(7)</sup>しかしシオランはこう反駁する——《自殺という行為こそ、救済のもっとも究極的な形ではないのか。虚無こそが永遠の等価物ではないのか。》<sup>(8)</sup>絶対的に自己自身であるためには、自己存在が神に、ではなく、自己自身に属するためには、そうでありつづけるためには、自殺という行為以外には他にいかなる道も私たちには残されていない。自殺は迷妄でもなければ、狂気でもない。生まれた瞬間からその人生に書き込まれているプログラムの最後の行為なのである。運命的な行為なのである。しかしそれは神に属していない。

一般に考えられているように、人は錯乱の発作に駆られて自殺するのではない。そうではなくて、そこにとどまっていれば殆ど狂気と一つになってしまいそうな、明析さの耐え難い発作に駆られて自殺するのである<sup>(9)</sup>。

(「自殺との出会い」)

物が見えすぎるために、世界が分りすぎたがために、人は自ら命を絶つ。人生は不可解なのではない。不可解であるがゆえに死ぬのではない。そのまったく逆である。自殺は透徹した目を持つ者の最後の《精神の跳躍》であり、この世にいかなる救済ももたらさなかった神になり代って、自らを救済する神聖なる儀式である。まさしく自殺 (*suicide*) とは明析なる (*lucide*) ものの謂いであり、自殺者 (*suicidé*) とは明析さ (*lucidité*) そのものに他ならない。再び言うが、使命を失った者は、自殺以外のあらゆる行為を剥奪された者である。あらゆる行為を剥奪された無為の人は、行動する人よりもはるかに深く、物事の本質を見抜いた人である<sup>(10)</sup>。

使命なきとき、現実世界のすべては、一切が幻影である。幻影はまた己れ自身でもある。自らに死をあたえることにより、幻影たることをやめ、人は原初的な宇宙の根源へ還ってゆく。

自殺とは、ある突然の完遂であり、電撃的な解放であり、暴力的に成し遂げられたニルヴァーナである<sup>(11)</sup>。

(「同」)

しかし、シオラン自身は自殺しなかった。自殺を運命づけられた人が自殺をせずに、84歳まで生き延びた。そして膨大な著作を世に残した。これはどういうことだろう。同ヒルーマニア出身のM・エリアーデが、若い頃の反ユダヤ主義の極右的行動に口を噤んだままであったのに対して、シオランは常にこの過去の過ちに激しい自責の念を持ちつづけた。それほど的人物が、なぜ自ら死を選ばなかったのか。1970年に自殺した友人パウル・ツェランが、かつて1953年にシオランの『崩壊概論』をドイツ語に翻訳したが、そのドイツ語版の再版が出た折に、シオランはNRF誌に一文を寄せてい

る。この中で次のようなエピソードを語っている。二人のアンダルシアの学生が彼にこう訊ねた——「生きる根拠もないのに、どうして生きてゆくことができるのですか」シオランはこう答えた。「確固とした土台をどこにも見出せず、それでも私が生きながらえてきたのは本当のことです。というも、年とともに、人はあらゆることに慣れてしまうからです。眩暈にすら慣れてしまうのです。絶対的明析さは呼吸とは両立し得ないものですから、絶えず目をひらいて、自己を問いつづけることはできないのです(……)」<sup>(12)</sup>彼の鏡もときに曇ることがあるというのだろうか。いや、年とともにその明析の鏡は曇りを帯びはじめてきたというのだろう。生きていることの眩暈に慣れてしまえば、それはもはや眩暈ではない。件のアンダルシアの学生はまた、シオランに対して、なぜあなたは書きつづけるのかとも問うた。喜劇は40年以上にもわたって演じつづけられてきたと、シオランは自嘲気味に語って、書くことによって自分は自殺せずに生きてゆくことができたと告白している。書くことは彼にとって、生きてゆくことであり、徐々に死んでゆくことでもあった。妄執は薄められ、明析さに曇りが生じて、なおそれでも苦痛を抱いたままに書きつづけ、あるいは徐々に死につづけ、84年の生涯を閉じた。冒頭の「ついに死んだか」という私の感懐は、こういった彼の内奥の矛盾を思っただけのことであった。ニルヴァーナ(Nirvāna)とはサンスクリット語で本来は蠟燭の炎が徐々に消えることという意味であるらしい。もしこれが真実ならば、彼は本来の意味において、語源の通り、生命の火を燃やし尽して、自らの悲惨を最後まで生き抜いて、ニルヴァーナに到達したというべきだろうか。私には何とも言えない。あるいは《「存在の誘惑」に抗して》というル・モンド紙の言葉とは裏腹に、実際には「存在の誘惑」に負けつづけて彼は生きてきたのではあるまいか。「生誕の災厄」を呪いつづけながら。

自殺という固定観念は、生きることも死ぬこともできず、しかもこの二重の不可能性から決して目をそらさずにいる者の属性である<sup>(13)</sup>。

(「同」)

\*

現代は文学が終った時代である。文学の時代が終ったのではない、文学そのものが終りを告げた時代である。文学にはもはや時代を動かすいかなる力もない。現代の「文学」と呼ばれているものは文学の残滓、あるいはそれ以下、または「風俗」と呼ばれるべき類のものである。十九世紀の中頃、ブルジョワが支配したヨーロッパ社会にあって、人々は「神の死」をうすうす感じてはいたが、誰もあえてそのことを口に出すことはしなかった。口に出せる勇気を持った者は一人も

いなかった。人類は己れの起源として天使ではなく猿を選んだのである。神の死は自明のことだった。やがてニーチェが現われ、誰彼もが口を閉ざしていたこの真実を、声高らかに叫んだ——「神は死んだ」と。これとよく似た現象が、現代における「文学の死」という現象である。高名なネルヴァル研究家であり、プロヴァンス大学の教授であり、自身作家でもあるレイモン・ジャン氏に、私はこのことをぶつけてみたことがある。文学でしか生きられない私たちは、文学が死んだこの時代を、どうやって生きていったらよいのか、と。乱暴な問いであったが、ジャン氏は笑って答えなかった。文学が生きていた時代を生き抜いてきた者にとって、私の問いかけはまったく意味をなさぬものであった。文学の死後のことは、彼に何ら関係のないことであった。この問いに、シオランはどう答えたであろう。パリ滞在中に出会えなかったのがなんとしても残念である。

ともかく、作り出すべきものはもはや何もないのである、文学も哲学も、もはや存在しない<sup>(14)</sup>。

(「いくつかの袋小路に関する手紙」)

私たちは過去と断絶した時代に生きている。現代人には歴史性が剥奪されている。十九世紀にヘルダーリンが、キーツが、ウォルター・ペイターが受け継いだ古典古代の文学の伝統は、もはや私たちには存在しない。書くべき対象も、読んでもらうべき対象も存在しない。

小説家は自分の生活や人生についてくどくどと述べるが、われわれはよく承知しているのである、小説家はそれをただ信じているふりをしていただけだということ、彼がそこに発見する秘密に何ら敬意を払っていないこと、を。彼はそんなものには騙されない。読者であるわれわれはなおさらである<sup>(15)</sup>。

(「小説の彼方へ」)

詩人は知的な美学者となり、自己の作品にコメントを加え、私たちに説明するが、私たちに納得させることはできない。新しいものを作ろうとしても、失ってしまった詩人としての本能がいかにもあるかのように見せかけるのがせいぜいである。ポエジーというイデーそのものが詩的素材に墮し、インスピレーションの源泉に退行してしまったのである。《彼は自分の詩を歌う。由々しき衰弱である。詩的などんな意味も持っていない。》<sup>(16)</sup>作家も詩人も知性を駆使して創作活動にいそしむあまり、もはや作家でも詩人でもなく、彼らは文芸批評家や詩論家に成り下がってしまった。しかしこれは彼らばかりではない。知性の罫は私たち現代人すべてに張りめぐらされている。《知性のこの昂進

は、創作の本能が衰弱したことに伴うもので、今日の誰一人としてこれをまぬがれてはいない。》《現代で重要なのは作品ではなく、それに先行する、あるいはそれに付け加えられた評釈である。》<sup>(17)</sup>

生きた文学や哲学は存在せず、存在しているのは、貧血症の文学研究であり、哲学研究のみである。しかも大学のうす暗い研究室の中で、陰気な書棚にあたかも死体置場の死体のように、累々と並べられている本を抜き取って、死体解剖の如くに密室で行われる行為か、さもなくば、広い講義室で、櫛の歯が抜け落ちたようにバラバラとしかかないわずかの学生たちに向けて、独り言のように呟かれる空しい講義という、この道化芝居でしかない。しかも学生の誰一人として文学や哲学などを信じてはいない。心理学と形而上学がそれに輪をかける。不毛に不毛を積み重ねる。シオランは文学について、二つの空虚ということ語っている<sup>(18)</sup>。行き詰まった文学は二つの空虚に突き当たった。というよりも、むしろ二つの空虚に突き当たったことによって、文学は行き詰まってしまった。一つは、心理的空虚。もう一つは形而上的空虚。前者の象徴はマルセル・ブルーストである。自己以外に対象を持たない小説——それは小説の死を意味するのではあるまいか。自己が探究し表現するに足る内容を持った自己でなくなったこの現代において。

真にオリジナルな文学作品は存在しない。世界を突き動かす力を持った文学作品も哲学的思索も存在しない。ハムレットを気取っても、それは所詮、道化芝居に他ならない。現代の作品はシェイクスピアのあの宿命的な悲劇の相貌にはとうてい及ばない。マクベスの運命的悲劇の凄絶さには遠く到らない。そうであるならば、文学者は百年以上も前にマラルメが企てようとしたように、ペンを捨てて、湖に身を投げるべきであろうか。それがもっとも《人間的な》文学者の在り様であろうか。

文学が減びるべく運命づけられている、ということはあり得ることである。むしろその方がのぞましくさえある。(…)独創的な、あるいは深い作品はもはやない。もう親密なるものも、したがって夢も秘密も存在しない。幸福や不幸はそのすべての意味を失ってしまった<sup>(19)</sup>。

(「同」)

シオランこそ、二十世紀後半に登場した新しきニーチェというべきであろうか。文学者の誰一人として彼の黙示録に異を唱えることはできないのか。「存在の異端者」あるいは「反＝預言者」である彼の言葉は、異端などではなく、まさしく現代を生きる私たち文学者の正統的な言葉であり、正鵠を得た預言であるのかもしれない。ただシオランほど真っ向から正論を吐く勇

気がないだけなのかもしれない。それは、当然のことであろう。なぜなら、このような言葉を吐くことは、自らの存在を否定し、自らの歩んできた人生の殆どすべてを否認することに他ならないからである。

\*

文学の終焉とともに、やがて人類の滅亡がやってくる。人類はいずれは滅びる。数百年後か数千年後か分らないが、滅びることは誰の目にも明らかである。すでにその兆しが世界のあちこちで見られる(文学の終焉もその一つ)。この人類の滅亡について、シオランはフランソワ・ボンディとの対話でこのように語っている。

かつて人類の滅亡には一種の終末論的な意味合いがこめられていて、それは救済という観念と結びついてきた。今日では、人類の滅亡はやがて起こる一つの事実と見做され、そこにはもう宗教的含意はない。人類の滅亡は予見の範疇に入った。人類が終るのは周知のことである。周知の事実となったときから、進歩という観念には何か腐敗したものが入り込むようになった<sup>(20)</sup>。

(「人類の滅亡」)

救いのない終末、それが人類の未来の姿であるという。「反＝預言者」の面目躍如といったところか。進歩を信じているのは、機械の正確さを信じて疑わない情報工学の技術者か、唯物論的な脳生理学者だけである。腐敗は私たちの周囲に蔓延している。似而非宗教がそこで跋扈する。機械文明の行き着く先は、真に人を救済しないまやかしの宗教的雰囲気だけの世界である。そこでは、メランコリー者とヒステリー者が絶望的な祈りを捧げている。

懷疑は一つの精神の運動である。ボードレール風には、人は懷疑の中で強烈に生きるのである。この懷疑の精神を損ったのはキリスト教の罪である。信仰は人を際限のない自惚れへと導いてゆく。《もし私が神を信じていたならば——》とシオランは言う、《私は素裸で町を徘徊させたいだろう。》<sup>(21)</sup>進歩の思想を信じるのと同じ程度に、神の存在を信じるのは愚劣なことである。それは精神という水の流れが停滞し、淀み、腐ってゆくからである。常に自己への疑念と自殺への誘惑にとらわれながら、苦悩の中で生きつづけている者には、この腐敗は生じない。科学が標榜する人類の叡智や宗教が説く心の平安は、一種の共同幻想であり、楽園を追われた人類のノスタルジーにすぎない。

偏在の優位性を享受しているのは、神ではなく、苦痛である<sup>(22)</sup>。

(「宗教」)

(「存在の外れにて」)

もっとも強烈に神を否定している者が神の領域にもっとも近くいる。自殺の誘惑に常にとらわれている者が、もっとも充溢した生を生きているように。なぜなら、カオスにあってこそ、彼は生命の始源状態にあると言えるからだ。普通に考えられていることとは逆に、少しでも精神が弛緩すれば、それはカオスからロゴスへと「墮落」してしまうからである。ドグマが出来上がり、体系化され、一種の思想となって既成の枠組の中に組み入れられてしまうからだ。絶えずこのカオスの中に身を置くことは至難の業である。この眩暈に人は耐えられない。眩暈にすら慣れることがあるとシオランは言っていたが、前述の通り、そうなればもはやそれは「眩暈」とは呼べない。

シオランは幼い頃、墓地で遊ぶのを常とした。墓掘人が墓を暴いているのを友人たちと見ていたときのことである。墓掘人が彼らの方に小さな頭蓋骨を投げてよこした。シオラン少年は友人たちとその頭蓋骨をボールにしてフットボールに興じた。少年の頃から彼はすでに死と戯れていたというべきか。死は恐るべきものでも、崇高なものでも、畏怖すべきものでもなくて、足で蹴飛ばして遊ぶべきものであった。やがて己れ自身も蹴飛ばされる頭蓋骨となる存在であることを、彼は無意識裡に学び取ったことだろう。彼の悲しみの源がここにある。

もし君がただ一度だけ、理由もなく悲しくなったとき、それは、そうと知らずに、いままでの生涯が悲しかったということである<sup>(23)</sup>。

(「時間と沈降」)

彼が東洋的虚無に惹かれたのも、この理由のない悲しみのせいだったろう。西欧の厳格な宗教的倫理に責め苛まれることなく、また仮借ない原罪意識に押し潰されることなく、自然な形で空無に到達する東洋思想に、彼は限らない憧憬を抱いた。ある時期、彼は自らを仏教徒と見做したこともすらある。しかし、後にそれは自分の思い違いであったことを告白するが<sup>(24)</sup>、それはともかく、失敗や破滅や罪といった否定的な意味を持たないこの東洋的〈無〉(すなわちニルヴァーナ)に、彼は西歐的なものからは得られない安らぎを感じていた。これはスラヴ民族の中に流れる始源的な東洋性が働いていたためだとも言えるかもしれない。

虚無は仏教にとって(実を言えば東洋一般にとってそうなのだが)われわれ西歐人がこれにこめる何か忌まわしいものといった意味合いをまったく含んでいない。虚無は光の極限的経験と混ざり合っているのである。あるいは、こう言ってよければ、光り輝く永遠の不在の状態、光輝を放つ空虚の状態と掛け合っているのである<sup>(25)</sup>。

あまりに光が強烈なとき、私たちの目はもう何も見えず、あたりは真っ暗になる。これと同じ現象が東洋的虚無の状態なのだろう。〈空(くう)〉はすべての始まりであり、人が最後に立ち戻ってゆくべき極点である。しかし、生きながらにしてこれを経験する者はきわめて稀である。これは「悟り」の範疇に入る。凡人には辿り着き得ない境地である。確かに経験はし難い。わずかに憧憬の思いを注ぐのみである。物質も神も存在しない絶対世界、宇宙生成時の空間と呼んでもよいだろう。

\*

「シオランの文章には何の希望もないが、しかし救いになる」——すでに故人となった日本のある優れた哲学者の言葉である<sup>(26)</sup>。安易に比喩的な表現を使うのははばかれるが、シオランの言葉はあたかも末期ガン患者に投与されるモルヒネのような役目を果たしている。何の希望もないが、救いになる……。しかし、常用しすぎると中毒症状を起こしたり、次第に効力がなくなったりするということがまた、モルヒネと同じである。誰もシオランを生きることはできない。シオランは大いなる矛盾であるという言葉をもう一度繰り返そう。死ぬことを生きた稀有の存在である。そのことをもっともよく知っていたのはシオラン自身であろう。シオランについて、その思想について語ることは、至難のことである。論じれば論じるほどシオランの本質から遠ざかってゆくのがよく分る。実を言えば、誰一人として、シオランを生きることも、シオランについて論じることもできないのである。Quarto 版全著作集の巻頭言には、彼の『苦の三段論法』からの一節が引用されている。その一節をここで引用することによって、拙論の終りとしたい。

一つの著作についてのあらゆる評釈は、悪しきものであるか、さもなくば無用のものである。なぜなら、直接的でないものはすべて、無価値なものであるからだ<sup>(27)</sup>。

註

- (1) *Syllogismes de l'amertume, Oeuvres*, Gallimard, 1995, p. 810.
- (2) *NRF*, 1<sup>er</sup> septembre, 1983, p.81.
- (3) *Ibid.*, p.82.
- (4) *Ibid.*, p.78.
- (5) *De l'Inconvénient d'être né, Oeuvres, op. cit.*, p.1390.
- (6) *Précis de décomposition, ibid.*, p.612.
- (7) *Ibid.*, p.613.
- (8) *Ibid.*

- (9) *Le mauvais démiurge, ibid.*, p.1208.
- (10) *Précis de décomposition, ibid.*, p.600.
- (11) *Le mauvais démiurge, ibid.*, p.1204.
- (12) *NRF, op. cit.*, p.80.
- (13) *Le mauvais démiurge, op. cit.*, p.1210.
- (14) *La tentation d'exister, ibid.*, p.884.
- (15) *Ibid.*, p.902.
- (16) *Ibid.*, p.903.
- (17) *Ibid.*, p.904.
- (18) *Ibid.*
- (19) *Ibid.*, p.912
- (20) *Glossaire, ibid.*, p.1750.
- (21) *Syllogismes de l'amertume, ibid.*, p.786.
- (22) *Ibid.*, p.787.

- (23) *Ibid.*, p.767.
- (24) *Glossaire, ibid.*, p.1739.
- (25) *Aveux et anathèmes, ibid.*, p.1643.
- (26) 元九州大学哲学科教授滝沢克巳先生のこと。滝沢先生のこの言葉を、私は恩師である有田忠郎先生から聞かされた。当時大学院の学生であった私は、この言葉をよく理解できなかったが、現在ではよく納得できる。これは、知性が深まったとか、人生の経験を積んだとかいった理由ではなく、たんにこちらが年をとったせいだろう。因みに、恩師有田忠郎先生はわが国唯一のシオラン選集(国文社刊)の訳者であり、解説文も書かれているが、残念ながら入手できず参照するまでには到らなかった。
- (27) *Oeuvres, ibid.*, p.7.

(平成9年8月6日受理)